

流れは絶えず

―「方丈記」冒頭の文と文章の構造―

鳴海伸一

一 はじめに

「方丈記」冒頭文については、従来さまざまに論じられてきたが、そのなかで、文学・文献学研究としての指摘・考察は、個別の表現について、または文章全体の趣旨について、和漢の典拠をさがしあてることに、その関心の中心があつたといえる。それによって、鴨長明がこの文章を著すにあたって、どのような文章を発想の源としているか、また、どのような先行文学の表現をふまえた叙述をしているかということが、あきらかになつてきたといえる。

しかし、「方丈記」の文章を理解するには、それだけでは不十分と考えられる。内容上または形式上の個別の典拠があきらかになつたとしても、そのことだけで、この文章自体が日本語の文章としてどのような構造をもつものなのか、ということがあきらかになるわけではない。文や文章そのものの構造を分析することにより、日本語の文章史のなかでとらえなおすことが、この文章のより精確な読解につながるのではないだろうか。

文学作品について、国語学・日本語学の側からの分析によって、従

来とは異なる解釈をしめした研究のまとまったものとしては、小松英雄による一連の研究が知られるほか、藤原浩史による一連の枕草子研究などが挙げられる。これらは、文学研究において、先行する注釈等を無批判に継承してきた部分に、言語学的な側面から光をあてることによって、通説にとらわれない新解釈をみちびきだしたものとして注目される。本稿はそうした先学のひそみに倣い、「方丈記」冒頭文を題材として、先行注釈における指摘を議論のよりどころとしつつ、この文章の意図するところをあきらかにすることをこころみるものである。その際、先行の文学作品等にみられる表現をふまえることで、この文章が日本語の文章としてどのような意味内容を表したものであるかということ考察することに、方法の中心を置く。

さて、「方丈記」の本文としては、現在一般的にもっとも信頼のおけるものと考えられている、「大福光寺本」の本文にしたがう。『大福光寺本方丈記』（古典保存会、一九二六）を翻字した本文をしめすと、つぎのとおりになる。なお、文（センテンス）ごとに①～⑯の通し番号を付した。二節以降の本論中では主に、第一文、第二文、……といった指示のしかたをする。

- ① ヲク河ノナカレハタエスシテシカモ、トノ水ニアラス
- ② ヲトミニウカフウタカタハカツキエカツムスヒテ
ヒサシクト、マリタルタメシナシ
- ③ 世中ニアル人ト栖ト又カクノコトシ
- ④ タマシキノミヤコノウチニ棟ヲナラヘイラカラソヘル
タカキ(い) ヤシキ人ノスマヒハ世ミヲヘテツキセヌ物ナレト
是ヲ。コトカト尋レハ昔シアリシ家ハマレナリ
- ⑤ 或ハコソヤケテコトシツクレリ
- ⑥ 或ハ大家ホロヒテ小家トナル
- ⑦ スム人も是ニ同シ
- ⑧ トコロモカハラス人モヲホカレト
イニシヘ見シ人ハ二三十人中ニワツカニヒトリフタリナリ
- ⑨ 朝ニ死ニタニ生ル、ナラヒ(ただ) 水ノアハニソ似リケル
- ⑩ 不知ウマレ死ル人イツカタヨリキタリテイツカタヘカ去ル
- ⑪ 又不知カリノヤトリタカ為ニカ心ヲナヤマシ
ナニ、ヨリテカ目ヲヨロコハシムル
- ⑫ ソノアルシ。スミカト無常ヲアラソフサマ
イハ、アサカホノ露ニコトナラス
- ⑬ 或ハ露ヲチテ花ノコレリ
- ⑭ ノコルトイヘトモアサ日ニカレヌ
- ⑮ 或ハ花シホミテ露ナヲキエス
- ⑯ キエストイヘトモタヲマツ事ナシ

④の(い)とある部分は、大福光寺本では一文字分汚れて不明であり、他の諸本によって通常「い」が補われる箇所である。④・⑫の^マ・^トとある部分は、大福光寺本の本文において、字間に。が、その右傍に「マ」「ト」が書き入れられている箇所である。⑨の(ただ)とある部分は、虫損の箇所である。これも他の諸本によって通常「ただ」が補われる。

本論中で引用する際、これらの補われたり書き入れられた部分については、読みやすく補った形で引用する。また、本論中では適宜、漢字をふり句読点をほどこしたものも使用する。

文の区切り方は現行の「方丈記」の諸注釈ではおおむねこのようになつており、本稿もそれにならうものである。

⑯のあとはいわゆる五大災厄の内容になつており、ここまですべてのまとまった内容を持つ「冒頭文」と考えるのが一般的であろう。ただしこの中をさらにいくつの小段落に分けるかということについては、注釈書によつてまちまちである。本稿の分析によつても、特にその点について従来にない段落構成を提示するものではない。次節以降の分析であきらかになる通り、①～③を第一段、④～⑨を第二段、⑩から⑯を第三段とすることになる。

次節以降は、第一文から順に、「方丈記」冒頭の文・文章を検討していく。

二 第一文

冒頭の一文またはそれを含む冒頭部分の文章については、漢籍の典故がいくつか指摘されている。たとえば、代表的なものとしては、次の論語や、文選・歎逝賦の文章が挙げられる。

- 1 子在川上曰、逝者如斯夫。不舍昼夜。 (論語、子罕第九)
- 2 方丈記とて、仮名にて書き置けるものを見れば、はじめの詞に、

行く水の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず

とあるこそ、

世間人而為世 人再々行暮

河関水而為河 水滔々日度

といふ文を書けるよ、とおぼえて、いとあはれなれ。

(十訓抄、九ノ七)

1は、川の流れを見ながら、人が死んでゆくことはこのように絶え間がないといったものである。2は、「十訓抄」の一節であるが、「方丈記」冒頭文を、文選・歎逝賦の、「世は人が集まってでき、人はしだいしだいに老いていく。川は水が集まってでき、水は滔々と流れる。」という文章内容をいったものであるとしたものである。

このほか、万葉集・拾遺集中の人麻呂歌などが、典故として挙げられている。

文選・歎逝賦については、ごく最近の研究においても、新聞水緒(二〇一四)では、冒頭の一文だけでなく、冒頭文全体にわたって「歎逝

賦」注文の影響がみとめられると指摘されている。

しかし、典故とされるこれらの文章をみても、内容の上で類似している部分があるという点以外に、形式の上で、つまり個別の言語表現の点では、方丈記の文章と必ずしも似てはいない。明確な典故があったとしてもそれを逐語訳してこの文章が成り立ったのでないかぎり、それはある意味当然のことともいえる。仮に発想の上で、その内容をふまえて書いたと考えられる、いわゆる「典故」が、(あるいは複数)あるとしても、結果としてできあがったこの文章はあくまでも当時の日本語の文章として読む必要がまずはあるのではないか。この文章がそれ自体としてどのような構造と内容をもつものであるか、あるいは意図したものであるか、といったことは、典故さがしとはひとまず別に検討されなければならないのではないか。それによって、どのようなものが典故と考えられ、それをどのようにに撰取しているか、といったことに対する理解もより深まっていくのではないか。

後述するように、典故としての蓋然性の高いものについては、内容理解上の参考にすることができると考えられるが、まずは日本語の文章としてのこの「方丈記」冒頭文が、どのような構造を持ち、どのような意味内容を表しているかということを考察することを、本稿では目的とする²⁾。

二一 一 ユク河ノナカレハタエスシテ

冒頭の「ユク河ノナカレハタエスシテ」の部分については、どのような内容を表したものであるか、より直接的には何と現代語訳(逐語

「ユク」と「ナカレ（流れ）」が意味的に重複しているというものである。「河ノナカレハタエスシテ（河の流れは絶えずして）」とでもすれば、表されるべき意味はそれで十分に表され、その場合「ユク」「ユク河」という表現は何を意図したものが不明となるというのである。

たとえば三木紀人校注（一九七六）では、「意味的には不要に近い「ゆく」が、川の流動感を印象的に伝える」と説明する。しかし、推敲をかさねてできあがったはずの冒頭文の冒頭第一語に「不要」な語が現れるとは考え難い。また、佐竹昭広校注（一九八九）では「ユク水」と言わず、用例の稀な「ユク河」の語を用いているところから、法句經に依拠したと推測する」として、典拠との関わりで理解しようとする⁴。しかし後述するように、「稀」ではあっても「ユク河」という表現は日本古典にみられるのであり、まずはそれとの表現上の関連を考えるべきではなからうか。ある典拠にしたがって書いたために日本語として稀（あるいは不自然）なものになったという方向で考えることにつながっていくとしたら、当然それは受け入れがたい。ここは、「ユク河」という表現が何を表したものであるかといった観点から考察をすすめたい。

「ユク河」という表現は、きわめて用例が少ないながら、万葉集に次のように二例見られる。

3 行く川の過ぎゆく人の手折らねばうらぶれ立てり三輪の檜原
は
（万葉集、巻第七、一一一九）

4 大君の 遠の朝廷そ み雪降る 越と名に負へる 天離る

鄙にしあれば 山高み 川とほしろし 野を広み 草こそ繁き
鮎走る 夏の盛りと 鳥つ鳥 鶉飼が伴は 行く川の 清き背
ごとに 籥さし なづさひ上る
（万葉集、巻第十七、四〇一一）

3は、過ぎ行く人々が手折らないので、三輪の檜原がさびしそうに立っている、ということである。長歌の一部である4は、鶉飼たちが川の清い瀬ごとに籥火をともしている、ということである。いずれも、「方丈記」と同様に「行く川の」という表現になっている点が目される。4については、万葉集中に「……川（の）清き背」という表現が八例あり、一種の定型表現と考えられる。次の5のように、川の固有名を冠し、特定の川を指すものが多いが、固有名の無い4のばあいも、こうした表現のひとつとして理解すべきものと考えられる。

5 夕さらずかはづ鳴くなる三輪川の清き瀬の音を聞かくし良し
も
（万葉集、巻第十、一二三二）

そして3は、「過ぎゆく」に係る枕詞（的用法）といえるものである。そこで、問題の「方丈記」の当該箇所も、枕詞（的用法）として理解することはできないだろうか。その場合、何に係るかといえれば、「ナカレ」もしくは「ナカレハタエス（シテ）」である。3の例が「過ぎゆく」に係るものであったものと、内容的にもごく類似したものとして理解することができる。また、このように考えれば、「ユク」を不要のものとする必要もなくなる。

「ナカレハタエス（シテ）」とは、「流れが絶えない、絶えず流れる」ということであるが、そのような表現は、当然ながら先行する文学作品

品にもみられるものである。

6 あひ見ては心ひとつをかはしまの水の流れ絶えじと思ふ
(伊勢物語、二十二)

7 有栖河おなじ流れは変らねど見しや昔の影ぞ忘れぬ
(新古今和歌集、八二七)

8 年を経て絶えずながれし涙にも舟の浮かばぬ時はなかりき
(うつほ物語、春日詣)

9 しかありしよりこのかた、その道盛りに興り、その流れ今に
絶ゆることなくして、色にふけり心をのぶるなかだちとし、世
を治め民をやはらぐる道とせり。
(新古今和歌集、仮名序)

6、7は、川の水について言ったもの、8は涙について言ったものであるが、9は、和歌の道の流れという、より抽象的なものについて言ったものである。

このように考えれば、この部分の文・句の構造としては、

ユク河ノナカレハ タエスシテ

という、いわゆる主述の構造ではなく、

ユク河ノ ナカレハタエスシテ

というように「ナカレハタエス(シテ)」が内容的にも形式的にもそれでひとまとまりで、「ユク河ノ」が枕詞的にそれに係る構造になっているということになる。

さて、このように「ユク河ノ」を枕詞(的用法)として理解することが、この冒頭文をどのように解釈することにつながるのか。それはこの文および後続の文の構造についての考察をすすめることよって、

あきらかになろう。具体的には、「流れは絶えず」とは何のどういうことを言っているのか、ということが、解決すべき疑問として生じる。その疑問を念頭に置いたうえで、次の部分へすすむことにする。

二二 シカモ

続く「シカモ」がどのような意味の接続詞としてつかわれているのかということについても、この「方丈記」冒頭文の解釈の問題としては、多くの意見が提出されてきている。それらにおける「しかも」の解釈は、大きく分けて二つの意見が対立しているといえる。一つは、一種の「逆接」的に(そうではあるが、しかし)といった意味で理解しようとするもの、もう一つは、(それだけでなく、そのうえ)といったように、現代語の「しかも」と同様の「累加・添加」の意味で理解しようとするものである。

まずは「しかも」の用例をいくつかみてみることにする。¹⁰「しかも」は漢文訓読語と考えられ、和文系統の文献には用例が少ないが、比較的早い時代の「しかも」には、以下のようなものがある。

10 中古の躰は学びやすくして、然も秀歌は難かるべし。詞古りて風情ばかりを詮とすべき故也。
(無名抄)

11 かやうに間々に皆一律をぬすめるに、五の穴のみ、上の間に調子を持たずして、しかも問をくばる事等しきゆゑに、その声不快なり。
(徒然草、二一九)

10は、同じ長明の筆になる歌論書「無明抄」からのものであるが、和歌の歌風について、中古のものは、学びやすいものの秀歌は少ないと

いつているものである。11は、笛の穴の配置を述べたもので、「五の穴」だけ、上の穴との音の間隔が異なっているのに、穴と穴の物理的間隔は等しいといっているものである。このように、古い文献に見られる「しかも」には、前件で述べられる内容と後件で述べられる内容とが、相反する内容、もしくは通常併存しにくい内容になっているものが多くみられ、方丈記のこの部分の「しかも」を一種の「逆接」¹¹として理解しようとするのは、こうした用例をふまえてのことと考えられる。時代は下るが、たとえば、平安朝を舞台にし、古代語の要素も取り入れて叙述されている、芥川龍之介の「偷盜」において、以下に挙げるような「しかも」が見られるのも、そうした用例を意識したものであろう。

12 a 老婆は、肩で息をしながら、侍の屍體の上に横たはつて、まだ相手の髻をとらへた、左の手もゆるめずに、しばらくは苦しきうな呻吟の声をつづけてゐたが、やがて白い眼を、ぎよろりと一つ動かすと、干からびた唇を、二三度無理に動かして、「お爺さん。お爺さん。」と、かすかに、しかもなつかしさうに、自分の夫を呼びかけた。が、誰もこれに答へるものはない。

b 母の膝を離れてから、何年にも感じた事のない、静な、しかも力強い安息である。

c 猪熊の爺は、形のない、気味の悪い「死」が、辛抱よく、丹塗りの柱の向うに、ちつと自分の息を窺つてゐるのを感じた。残酷に、しかも又落着いて、自分の苦痛を眺めてゐるの

を感じた。さうして、それが少しづつ居ざりながら、消えてゆく月の光のやうに、次第に枕下へすりよつて来るのを感じた。

(芥川龍之介「偷盜」)

12 aの「かすか」であることと「なつかしさう」であること、12 bの「静」であることと「力強い」こと、12 cの「残酷」であることと「落着いて」いることは、いずれも相反する性質もしくは通常併存しにくい性質ということができ、ここで見た古代語「しかも」の特徴と一致する。こうした用法は、現代語（この場合芥川の生きた時代も含めて考える）の「しかも」としてはやや違和感を覚えるものであろう。

そしてここで「方丈記」の冒頭文内の構造という点から考えると、この後の文章中に、「棟ヲナラヘイラカラソヘルタカキイヤシキ人ノスマヒハ世ミヲヘテツキセヌ物ナレト是ヲマコトカト尋レハ昔シアリシ家ハマレナリ」(第四文)とあり、「トコロモカハラス人モヲホカレトイニシヘ見シ人ハ二三十人カ中ニワツカニヒトリフタリナリ」(第八文)とあることが注目される。この部分は冒頭の今問題にしている一文をふまえ、人と住処のありさまを具体的に説明している部分であり、それと構造上も並行関係にあると考えるのがごく自然な理解であらう。そしてさらに、第四文・第八文のばあいにはそれぞれ、「世々を経て尽きせぬ」ことと「昔ありし家はまれなり」であること、「所も変はらず人も多」いことと「いにしへ見し人は二三十人が中にわづかにひとりふたりなり」であることとが、「逆接」的であるさまが比較的はっきりしている。これらのことから、冒頭の一文末、「逆接」

的なものとして理解するのが自然であるようにもおもわれる。

いずれにしても古代語の「しかも」にも、「方丈記」冒頭の当該箇所にも、いわゆる「逆接」的な意味内容を読みこむ余地はあるわけであるが、それに対し、安良岡康作（一九八〇）、手崎政男（一九九四・二〇〇九）などのように、そうした「逆接」的読みを否定する意見も提出されている。たとえば安良岡康作（一九八〇）は、「しかも」について、「なおそのうえに、の意。ここでは、「上の「流れは絶えずして」という状態の上に、とくに、「もとの水にあらざ」という別の状態を付加するために用いられた接統詞」とする。

ただし、管見の限り、そうした「累加・添加」での読みを主張する注釈においては、ことさら（10～12のような意味での）「逆接」でないものとして読まなければならない理由の説明が決して十分とは言えないように思われる。たとえば、手崎政男（二〇〇九）では「しかも」について、

この語は、「それに加えて、その上に、それでいて」というように、先述した事実の上に、さらにいまひとつの事実を付け加えようとする、添加の意の接統詞であって、これを逆接の意の「しかし」などと混同してはならない。すなわち、この第一文は、「河の流れ」を、総体として、恒常・不変の相においてとらえたその観照の上に、その、「流れ」を構成する要素としての「水」を、刻々に移りゆく、変移・転変の相においてとらえた観照を添加して、「恒常にして、しかも転変」と、とらえることで、「河の流れ」の総体としての「実相」を言おうとするのである。（傍点原文）

と述べるのだが、「恒常にして、しかも転変」であるならば、その「恒常」と「転変」との間に「相反する性質もしくは通常併存しにくい性質」といった関係を読み取ればそれは「逆接」的ということになるわけであるから、議論は必ずしもかみあっていない。つまり、添加と言っても二つの性質の意味的關係によって「逆接」的になり得るわけである。

したがって、累加・添加という性質を現代語と同様に古代語においてもみとめたうえで、場合によっては相反する性質についても（それは現代語では起こりにくい）、累加・添加し得るものとして古代語の「しかも」をとらえる、というのが穏当であろう。¹² そのうえで、ここで問題とすべき（問題にし得る）ことは、この「しかも」について、積極的に「逆接」として、つまり「（行く川の）流れは絶えない」ことと「もとの水ではない」ことを相反するもしくは通常併存しにくい性質のものとして理解するかしないかの違いに帰結するものと考えられる。つまり結局、この場合「（行く川の）流れは絶えない」ことと、後続する「もとの水ではない」ことが内容上どのような関係になっているかということがわからなければ、「しかも」が逆接であるかそうでないかということの決着はつかない。あるいは、その両者の關係をどのようなものとして理解しようとするかということが、各注釈における「しかも」の理解にそのまま投影されているともいえよう。

さてここまで考えてきたうえで、もしこの部分に典拠があるならば、そこではどのような内容が表されているかということを考えることは、当該箇所「しかも」の文法的意味を考察する際の「参考」には

なり得よう。しかしどうやら、中国文献を見ても、はっきりとしたこととはわからず、この件について定説といったものはないようである。それはつまり、内容・発想の上で類似していても、「ユク河ノナカレハタエシテ」と「モトノ水ニアラス」との両者にそれぞれ（できれば形式的にも）対応する箇所を兼ね備えた「典拠」というものが無いために、結局、「ユク河ノナカレハタエ」ないことと「モトノ水ニアラス」であることとの関係は不明のままのころ、ということである。

そこで本稿では、「しかも」が逆接的解釈を許容しうる条件という観点から考える。現代語とは異なる古代語の「しかも」の特徴として、したがってこのばあいの「逆接」的な解釈が可能になる条件・特徴として、以下の点が指摘できる。まず、文（センテンス）と文（センテンス）とをつないだものではないということである。現代語では、

13 お爺さんは、いつも、ひどく低い声で言ふ。しかも、言葉の

後半は、口の中で澀んで、ああ、とか、うう、とかいふやうに

しか聞えない。

（太宰治「お伽草紙・舌切雀」）

のように、文と文を「しかも」が接続することがごく普通にあるが、そのようなものは見られない。そしてそのうえで、二つめとして、ある性質をそなえつつ、別の、それとは異なる性質をあわせもっている、といった意味内容であることである。そのようなばあいに、「逆接」的な解釈がしやすくなるといえる。これは前述（注11）したように、あくまでも論理的関係というよりは、意味内容上の「逆接」ととらえるべきであるということと関係があるろう。また、12の芥川の例も奇しくもそうした特徴をそなえているといえよう。

そのように考えると、「方丈記」冒頭のこの一文における「しかし」は、本稿の解釈のしかたによれば、そうした意味での「逆接」的な解釈が十分可能な例ということになるろう。第二段以降との関係もあわせ考えて、一応、そのように解釈したうえで、この文の解釈作業をつづけることにする。

なお、そうした「逆接」的な「しかも」を現代語訳する際には、相反する性質もしくは通常併存しにくい性質を、累加・添加することから、（それでいて）とするのが穏当といえようか。こうしておけば、はっきり「逆接」と読む立場とも、そうした読みを否定する立場とも、矛盾しないと思われる。

二一三 モト

「ユク河ノ」ナカレハタエシテ」と「シカモ」でつながれる、「モトノ水ニアラス」とはどういうことであろうか。代表的な注釈書における現代語訳では、「その川の流れをなしている水は刻刻に移って、もとの水ではないのだ」（築瀬一雄一九七二）、「その河の水は、もとの同じ水ではない」（安良岡康作一九八〇）、「水はもとの水ではない」（神田秀夫校注・訳一九九五）、などとなっている。

ここで解釈の際に重要なのは、「モト」の理解であろう。流れが絶えずして、「モト」の水ではないとは、どういうことか。モトとは、いつと比べた、いつの時点の状態をさしているのか。

「もと」とは、ふつう、ある時点を基準にして、それより前（の状態）、もしくはその中のある一時点（の状態）をさすものである。それは現

代語のみならず、古代語においても同じである。

14 されど、こぼちわたせりし家どもは、いかになりにけるにか、
悉くもとの様にしも作らず。
(方丈記)

とある「方丈記」の一節における「もと」とは、家がこわれてしまふ前の状態を指したものである。つまり、壊れてしまった状態を基準として、そうなるまえの、(このばあいある程度持続的な)時間をさすものである。

では当該箇所「モト」はどうか。前掲の諸注釈では、「もと」とそのまま訳しているため、時間の断絶や状態の変化がどこにあるのか不明になっている。あるいは、川の水が絶えず流れる、その任意の二時点をとり、どの二時点をとつても「同じ状態ではない」といつていることにでもするしかならなう。いずれにしても、「モト」の使用法としてはきわめて異例である。

このばあいもかならず何らかの基準となる一時点があると考えられる。それはいつかといえ、当然「今」「現時点」つまり発話時ということにしかなり得ない。それでは発話時以前のどの時点と比べているのか。これも、水が絶えず流れているという状況を考えると、それはいつでもよい、つまりいつであつても理屈は成り立つということに一応はなる。つまり、一分まえでも、一時間まえでも、一か月まえでも、一年前でもよいということになる。しかしそれではやはり不自然であろう。いったいこの一文は何について述べたものなのか。

二一四 冒頭の一文の構造

この文が、川の水の流れゆくありさまを描写した文なのだとすれば、「もとの水ではない」ということがどういうことであるのか、解釈がむずかしくなる。本稿での解釈では、「ユク河ノ」が枕詞的用法であり、「ユク河ノ」ナカレハタエス」でひとまとまりと見、従来理解されてきたような主述関係のみとめない。そして前述したように、「シカモ」が文と文をつなぐものでなく、したがって「ナカレハタエス」と「モトノ水ニアラス」とが、通常併存しにくい性質をあわせもつたものとして「累加添加」して述べられている、とすると、いわゆる「主語」がこの文には無いことになる。つまり、この文を、骨組みだけのこして簡略に現代語訳すれば、

流れは絶えず、それでいて、もとの水ではない
となる。それでは、何が「ナカレハタエス」であり「モトノ水ニアラス」であると言っているのか。

その答えは、第三文にある。「人ト栖(人と住処)」である。「人と住処」が、自分のかつて見聞きしていたものではない、といっているのである。「今」(発話時)と「昔」を比べて「モト」といつているのであり、それは絶えず流れる川の水について言うのは不自然でも、身の回りの人と住処について言うのは、ごく自然なことである。結論を述べれば、この一文は、(そして第二文も)、「人と住処」の性質を述べたものと考えるのが、もつとも自然な解釈となる。つまりこの文は、川の水の流れゆくありさまを描写した文でもなければ、川一般の性質を述べたものでもないのである。

内容的には、「ナカレハタエス」とは、人や住処の全体がなくなったり途絶えたりすることはない、ということであり、「モトノ水ニアラス」とは、その全体の流れを構成する要素としての個々の「人」や「住処」は、以前と同じものがそのまま残っているのではない、ということである。そしてこの点、前掲の典拠として挙げられた、文選の「世間人而為世」「河閩水而為河」というのは、(日本語表現としてでなく)内容上、非常に似ているということは指摘できる。

つまり、第一文と第二文が、ともに第三文に形式上も内容上もつながっていくものと考えられるのであるが、この冒頭三文が全体としてどのような構造になっているかは、のちに改めて考えることにして、次節では第二文の解釈にうつる。

三 第二文

三一 一 ヨトミニウカフウタカタハ……

第二文も、第一文と同様に、「人と住処」の性質を述べたものと考えられるが、この文を解釈するうえでまず重要となるのが、「ウタカタ」である。各種注釈では「水の泡」と注釈するが、古典文学にみえる用例では、単純に「水の泡」そのものを表したもののよりも、次のように、はかなく消えてしまうことを象徴するものが一般的である。

15 降り止めば跡だに見えぬうたかたの消えてはかなき世を頼む哉
(後撰和歌集、恋五、九〇四、よみ人しらず)

16 雨降れば水に浮かべるうたかたの久しからぬは我身なりけり

(赤染衛門集、四五六)

いずれも、「消えてはかなき」「久しからぬ」など、へながつづきしないことを意味する内容と結びついた形で使用されている。仮に「うたかた」自体が「水の泡」を意味する語であるとしても、実際の用例としては、はかなさをたとえたものとして、後続する「消ゆ」等の表現との結びつきの方を、解釈上は重視すべきではなからうか。「方丈記」当該箇所も、「カツキエ(かつ消え)」と続くものであることを考え合わせれば、ここもそのようなものとして解釈することができるのではなからうか。

つまりここでは、一文めと同様に、

ヨトミニウカフウタカタハ カツキエカツムスヒテ

という主述関係による理解をしりぞけ、

ヨトミニウカフ ウタカタハカツキエ

というように、「ウタカタハカツキエ」をひとまとまりの表現と考えるのである。なぜ「ウタカタ」なのかといえは、「河」「流れ」「水」の縁で選ばれたものと考えるのが自然であろう。それに前接する「ヨトミニウカフ」は、これも第一文と同様に「ウタカタ」にかかる枕詞的用法と考えれば、構造上も第一文になぞらえて理解することが可能となる。16の例も「水に浮かべる」が枕詞的に「うたかた」にかかっている。¹⁴

三一 二 カツキエカツムスヒテ

さて、「カツキエカツムスヒテ」の部分については、通常の注釈書

では、「かつ……かつ……」という漢文訓読由来の表現として、(一方では……し、また一方では……する)という意味であると説明する。たしかに形としては二つの「かつ」が並列してつかわれており、そのような内容で理解することも、後述するように本稿でも決して否定するものではないのだが、「かつ」の用法はそうしたもののだけではない。次のように、「かつ」がひとつだけで(はかなく、あつという間に)といった意味を表す用法がある。

17 うつせみの世にも似たるか花ざくら咲くと見しまにかつ散りにけり
(古今和歌集、春歌下、七三)

18 かつ消えて空に乱る、泡雪は物思ふ人の心なりけり

(後撰和歌集、冬、四七九、藤原かげもと)
17は、咲いたと思つたらあつという間に散ってしまったということである。18は、淡雪が、降りつつたちまち消えてしまう、ということである。当該箇所とおなじ「消ゆ」や「散る」にかかり、あるものがすぐになくなってしまふことを表すものである。

つまり、「よどみにうかぶ」は「うたかた」を導く枕詞であり、「うたかたはかつ消え」までがひとまとまりとなつて、(水の泡のように)はかなく消えてしまふ)という意味内容を表していることになる。そしてその内容と、通常併存しにくい性質としてあわせもっているものと考えられる「ヒサシクト、マリタルタメシナシ」とを接続する働きをしているのが、「カツ……カツ……」という並列表現であると考えられるのである。(はかなく消えてしまふ)ものでありながら、一方では新たに生じるものでもあり、それによって、「久しくとどまつて

いない」という叙述につながるのである。(はかなく消えてしまふ)だけでなく、一方では新しいものが次々に生まれるという事象を対してとりあげる点が、長明の独自性といえよう。つまり、第一文における「シカモ」と同様の接続機能を、この「カツ……カツ……」がもっていると考えることができるのである。

なお、「消ゆ」と「結ぶ」が対で用いられることは、次のように先例もある。

19 こゝに消えかしこに結ぶ水のあはの憂き世に廻る身にこそありけれ
(千載和歌集、釈教歌、一一〇二、藤原公任)

これは、輪廻転生するわが身を水の泡(「ウタカタ」ではない)にたとえたものである。それに対し「方丈記」の当該箇所は、「水の泡」でなく「ウタカタハカツキエ」と対になるものとして「カツムスヒテ」をとりあげ、それによって「ヒサシクト、マリタルタメシナシ」を提示するという理屈になっている。

こうして、第一文が「ユク河ノナカレ」を描写したものでないのと同様に、第二文も、「ヨトミニウカフウタカタ」を描写したものである。この文を、骨組みだけのこして簡略に現代語訳すれば、はかなく消えてしまひ、かと思うと一方では生じ、長い間とどまっていたためしがない。となる。何がそうなのかといえ、当然こも「人と住処」が、ということである。

三十三 ……タルタメシナシ

(源氏物語、玉鬘)

そしてこの一文に関して、最後に問題になるのは、「……タルタメシナシ」という表現における「タメシ」の用法である。青木伶子編（一九六五）によると、諸本ではこの部分はいずれも「とどまる事なし」と「まる事なし」となっていて、「……タメシナシ」となっているのは、この大福光寺本のみである。

「ためし」というのは（前例、先例）ということであり、通常人間にかかわるもの、あるいは人為的なものについて使用されるものである。「川の淀み」を長時間・長期にわたって見つめ続けているわけでもあるまいし、このような局所的な自然現象について述べたものとするのは不自然である。大福光寺本以外の多くの諸本において、「……事なし」となっているのは、この文が「水の泡」のありさまを描写したものと理解し、その場合に日本語表現上自然な方へ無意識的にも改変がなされたものと考えられよう。第一文と同様、この文も、「人と住処」の性質を述べたものであり、川のように水や水の泡のありかたを説明したのではない。「人と住処」について、今まで「久しくとどまっている」などということが起こった「ためし」は無い、といっているのである。

その際、単に（ものが同じ場所にある）ことを表すだけでなく、（死なずにいる、滅びずに生き続ける）ことをも表す「とどまる」という語が使用されているのも、偶然とは思われない。

20 風の音にてもえ聞き伝へたてまつらぬを、いみじく悲しと思ふに、老の身の残りどどまりたるもいと心憂けれど、

この例は、老残の身で死なずに生きながらえることを恥じている場面である。この点、「とどまる事なし」とする諸本（一条兼良筆本、近衛家本など、流布本系統）は、二重に改変が加えられたものといえる。付言すれば、「かつ結びて」の「結ぶ」も、「庵を結ぶ」のように「住処・家」を建てることに關して使用する語であることも、意図した語選択であろう。

四 第三文

さて、ここまで述べてきた二文をうけて、第三文で、「世中ニアル人ト栖ト又カクノコトシ（世の中にある人と住処と、またかくのごとし）」と述べてまとめるのである。この三文を、ここまでの解釈によつて、骨組みだけを残して現代語訳すれば、

流れは絶えず、それでいて、もとのままではない。

はかなく消えてしまひ、かと思ふと一方では生じ、長い間とどまっていたためしが無い。

世の中にある人と住処とは、そのようなものである。

となる。第一文と第二文は、いずれも第三文の「人と住処」の性質を述べたものであるから、この三文でひとつながりの文と考えることもできる。すなわち、

世の中にある人と住処とは、「流れは絶えず、それでいて、もとのままではない」「はかなく消えたかと思ふと、一方では生じ、

長い間とどまっていることはない」という性質をもつものである。という構造をもつ文章として、この三文を理解することができる。

繰り返して述べてきたように、あくまでも第三文にある「人と住処」の性質として第一文、第二文があるのであり、はじめの二文は川の水の流れや水の泡そのものについて述べたものではない。また、川の水の流れや水の泡の説明をしたうえで、「人と住処」もそれと似た性質を持っている、といっているのでもない。はじめから「人と住処」の性質を述べたものとして第一文・第二文があるのであり、それが河・流れ・水・よどみ・うたかた、といった縁語でまとめられているに過ぎない。もちろん、「に過ぎない」というのは、この文章の、内容上の骨組みを理解するための話であり、川の流れや水の泡がそのような性質を持つものであることも、結果としてあるいは表面的には表しうることを否定するものではない。しかし、この文章の主眼は、そして第四文以降の内容は、あくまでも「人と住処」のありさまを述べることにあるのであり、実際、このあと「方丈記」全編を通じて、第九文に「水の泡」という表現が一か所見られるほかは、「川の流れ」は話題に上らない。

それでは、このような構造を持つ文章は、ほかに例が見られるであろうか。たとえば、同じ方丈記から次の例をみてみる。

- 21 みさごは荒磯にゐる。すなはち人をおそるがゆゑなり。われまたかくのごとし。事を知り、世を知れば、願はず、わらず、
(方丈記)

この場合は、みさごが人をおそれて荒磯にいるのと同じように、自分

流れは絶えず

も世の中や物の道理をわきまえているから、分不相応な願いもせず、あくせくすることもない、といったものである。冒頭文と同様に「かくのごとし」とまとめられているが、これは単純に自分を「荒磯にゐるみさご」に例えたものであり、「自分のもつ性質」として一般化・抽象化された形では「みさご」の性質が述べられてはいないという点で、冒頭文とは比喩の在り方が異なるといえよう。つまり自分は荒磯にはいないし、人をおそれているわけでもないからである。

それに対し、次の例は、構造上よく似ていると思われる。

- 22 しかはあれども、伊勢の海清き渚の玉は、拾ふとも尽くることなく、泉の袖しげき宮木は、引くとも絶ゆべからず。物皆かくのごとし。歌の道、また同じかるべし。

(新古今和歌集、仮名序)

これは、古来多くの歌が詠まれてきたから、もう歌に詠むべき材料は残されていないとおもうかもしれないが、そのようなことはなくて、歌材というものは、「拾つても尽きることはない」ものであり、「引いても絶えてなくなるものではない」ものである、と述べたものである。「伊勢の海清き渚の玉」や「泉の袖しげき宮木」そのものの性質を説明することに主眼を置くものではない。新古今集の仮名序にみえるこの文章は、方丈記冒頭とよく似た構造を持つものとして、指摘することができよう。

また、時代はまったく異なるが、次のようなのが、構造上の類似という点でわかりやすいものとして挙げられる。

- 23 智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば

窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。(夏目漱石「草枕」)

これは、四文めに述べられる「人の世のすみにくさ」を説明したものと、一文めから三文めが据えられている。その点で、方丈記冒頭文と非常によく似ている。方丈記冒頭文は、このような構造をもつものとして理解しなおすことが可能になる。

いずれにしても、冒頭の三文は、縁語によってまとめられつつ、「人と住処」の性質を直接に指しうる語を配置し、さらに、形式上の対応関係と内容上のつながりを重層的に響かせることによって、全体が緊密に構成された、名文であるということが出来る。

なお、こうした解釈については、それと似た捉え方をしている(ようにも見える)ものが、たとえば古注にもある。次にあげるのは、江戸前期の国学者、加藤盤齋による注釈の一節である。

24 行水のながれハたえずしてハ。人家の世界にたえずあるにたとふる也。しかも本の水にあらずとハ。人家のたえずしてあるかとみれば。昔より常住不変にしてあるはなし。いくたびもつくりかへし家どもなりとたとふるなり。

(加藤盤齋「長明方丈記抄」)

冒頭の第一文について、直接に「人家」のありかたとして説明しているように見える。ただしこれは、第一文の抽象的な表現に、第四文以降の内容をふまえた具体的な説明を単純に対応させたもの、と見る方が自然であろう。本稿は、内容が対応しているだけでなく、そもそも文・文章の構造として、(川の水の流れではなく)人と住処について説明したものと捉えようとするところみである。

五 第二段

前節で述べたように、第三文までは、ひとつながりの内容をもつものとしてまとめることができる。そこでの「人と住処」のとらえ方もとづいて、第四文以降は、「人と住処」のより具体的なありさまを説明したものと考えることができる。ここで内容上段落があらたまつていると考えて、以下を第二段とする。

五―一 是ヲマコトカト尋レハ

第四文は、「タマシキノミヤコノウチニ棟ヲナラヘイラカラアランヘルタカキイヤシキ人ノスマヒ(玉敷きの都のうちに、棟を並べ、いらかを争へる、高き卑しき人の住まい)」を、「世ミヲヘテツキセヌ物(世々を経て尽きせぬもの)」としたうえで、「是ヲマコトカト尋レハ(これをまことかと尋ねれば)」、「昔シアリシ家ハマレナリ(昔ありし家はまれなり)」とする。「世々を経て尽きせぬもの」であることと、「昔ありし家はまれなり」であることとの意味上の関係は、前述したとおり、一種の「逆接」的なものと理解するのが自然と思われるが、それでは、「これをまことかと尋ねれば」ということがどのようなことをいったものなのかということに関しては、従来の注釈の意見は一致しない。

「これをまことかと尋ねれば」を(これを本当かと尋ねると)と訳した場合、その前件と後件との関係が、やや理解しにくいものになる。

「本当かと思つたら間違いだつた」という関係としてとらえれば、「……ツキシヌ物ナレト」といちおう断定していることと矛盾し、その場合には「尽きないもののように見えるが」（神田秀夫校注・訳一九九五）などと原文に無い要素を補つて訳さなければいけなくなる。これに対し、「まこと」かと思つたら「まこと」ではなかつた」とすればそのような矛盾は避けられる。つまり、「まこと」を單純に〈嘘・間違い〉に對する〈ほんとう、眞実〉ととらえるのではなく、別の意味を持つものとして理解する方向をとるものであり、「それが眞実昔のままに存しているのかとただしてみると」（西尾実校注一九五七）などの解釈が挙げられる。

原文に無い要素を補うことはできれば避けるべきと考えるのが穩当であろう。とくにこの場合、断定しているか、「ように見える」と断定を避けているかという違いは大きいように思われる。かといつて、「まこと」の意味内容の理解の仕方では処理しようとする方向は、論理的矛盾を避けられるという利点はあるが、その分、解釈のしかたが恣意的になつたり、なぜそのようにとらえることが可能なかかという点で、説得力に欠けるものになつたりするおそれがある。また、仮に漢籍における「眞」「誠」等の字義に、それに近いものがあつたとしても、それがただちにここでの「まこと」の解釈に利用できるものでもないであろう。

そこで本稿では、「まこと」単独で考えるのではなく、すこし広げた範囲で考えることを試みる。「まこと」には、「まことか……する・したところ」といった構文の例がいくつみられる。以下に挙げるよ

うなものである。

25 まことかと聞きて見れば言の葉をかざれる玉の枝にぞありける
(竹取物語)

26 物言ひ懸想せし人は、このごろ里にまかり出でてあなれば、まことかと行きてけしき見むと思ひて、いみじく忍びて、ただ小舎人童ひとりして来にけり。(堤中納言物語、はなだの女御)

27 われゆゑに月をながむと告げつればまことかと見に出でて来にけり
(和泉式部日記)

25は「蓬萊の珠の枝」を持ち帰つてきたというくらの皇子に對し、実状を問いただしてみたところ、といったことである。26は、かつて懸想した女性が最近私邸に退出しているということ聞いたので、眞偽を確かめようと思つた、ということである。27は、自分ゆゑに月を眺めていると告げられたことをうけて、様子を確認するために出てきた、ということである。

これらは、外からのある情報に接し、「その眞偽・内実を確かめる」といった文脈的内容であるといえる。つまりこれらの場合、「まこと」であると思ひ込んでいるわけでもなければ、「まこと」ではないとはつきり見通しているわけでもない。「間違いなくそうであるかどうか確かめる」あるいは「内実を確かめて自分の頭で納得しよう」として行動を起こす」といったものといえる。

方丈記の当該箇所も、このようなものとして理解することができよう。「世々を経て尽きせぬもの」であるということは、あくまでも世間で一般に思われていることであり、おおまかなとらえかたをすれば

そのように言えなくはない、といったことである。それに対して、「まことか尋」ねたところ、「昔ありし家はまれなり」というのは、昔あった家そのままのこつているわけではないということである。前件と後件との関係は、「しかも」の項で述べたように、通常併存しにくい性質をあわせもっている、ということである。全体的・一般的性質として家が途絶えてしまうことはないが、かといって、個別的にみると、昔のものがそのままの姿でそこにあるものでもない、つまり、今あるものは昔あったものとは別のものになっている、ということである。したがって、「本当」かと思つたら「うそ」だった、と解釈することもないし、また、「まこと」かと思つたら「まこと」で（は）なかった、と解釈する必要もない。つまり尋ねてみた結果が、「まこと」対「非まこと」といった意味での正反対の事態である必要はない。あくまでも、「世々を経て尽きせぬもの」でありながら、それでいて、「昔ありし家はまれ也」という性質をもちかねそなえたものである、ということである。このように、第一段での「シカモ」によって結び付けられるものどうしの意味的關係は、この段以降にもみられることがわかる。

なおお付言すれば、このように構文的観点から考察することによって、そこから逆算する形でこの場合の「まこと」の意味内容を考えることはできよう。仮に説明をこころみれば、（伝聞や一般論でなく）実際の現実感覚としてそうであると感じていくように、とでもなるであろうか。いずれにしても、単純に嘘か真実かといった二項対立的な概念ではないということになろう。

第五文・第六文は、「昔シアリシ家ハマレナリ」の内実、あるいはそのようになっている理由を具体的に述べたものである。去年焼けてことし再建したものであったり、大家が没落して小家になったりしている、ということである。そして、第七文で、「スム人も是ニ同シ」として、「家・住処」に関して言えることが、そこに住む人間についてもいえる、という説明が続く。

五―二 トコロモカハラス

第八文は、「トコロモカハラス人モヲホカレトイニシヘ見シ人ハ二三十人カ中ニワツカニヒトリフタリナリ」というものである。この文の構造には注意が必要であろう。第一段で確認した構造、および、第二段前半の「家」についての叙述と並行的にとらえることが可能であるから、ここも、内容としては、「場所も変わらず人も多い」が、それでいて、「昔あったことのある人は、わづかしかいない」という、通常併存しにくい要素が併存している、という構造は見やすい。

しかし、「トコロモカハラス」と「人モヲホカレト」とは、どのような関係になっているのだろうか。その点に関して従来の諸注釈ではほとんど言及がなく、十分な説明はないといえる。形式的には、「AモB」「CモD」と対句になっており、両者が並列したうえで、逆接の接続助詞「ど」を介して、「イニシヘ見シ人ハ二三十人カ中ニワツカニヒトリフタリナリ」につながっていく、とみることができそうに思われる。しかしそれにしては、「場所が同じ」ということと、「人が多い」ということが、内容上、対になりにくい組み合わせといえる。

外面的にも「カハラス」と「ヲホカレ」では対になりやすいとはいえない。あるいは逆に、後続する「イニシへ見シ人ハ二三十人中ニワツカニヒトリフタリナリ」からみると、それに直接対応する内容は「人モヲホカレト」の部分だけのように見えるのである。つまり、「これだけ多くの人がいながら、その中で昔あったことのある人は、二〜三十人に一〜二人の割合でしかない」という内容はつながりがわかりやすいが、そのうちの「人モヲホカレト」の部分（だけ）が形式上「トコロモカハラス」と対になっていることで、文全体としてアンバランスになっているとみることができるのである。

そこでこれも、「AモB」「CモD」が対になっている場合・なっていない場合の用例を探ることから考察を試みる。すると、以下のような用例が得られる。

28 「すみ果つまじき契りなりけむ」とながめわび別れし暁など、
所も変はらず、空の気色なども同じながらなるに、
(夜の寝覚、卷五)

29 乗り越えて討死したりしも、元暦二年二月四日なり。国もかはらず、月日もたがはず、重行同じく討死して、
(太平記、卷第三十二)

28は、場所も同じで、空の景色も同じだといっているものである。29は、国（つまり場所）も月日（つまり時間）も同じだといっているものである。これらの例は、「AモB」「CモD」という形式の上でも内容の上でも、対になっていることがわかりやすいものである。これと同じ意味で方丈記の当該箇所を理解することはむずかしい。

流れは絶えず

そこで、少なくとも内容的には、「トコロモカハラス」と「人モヲホカレト」を対ではないものとして理解することはできないであろうか。たとえば、「AモB」のBが「変はらず」であり、後続の「C（モD）」と特に内容上対になってはいないものには、次にあげるようなものがある。

30 故里となりにし奈良の都にも色はかはらず花は咲きけり

(古今和歌集、春歌下、九〇)

31 いささか御気色変はらず、念誦うちして、
(大鏡、道長)

32 「(略)」と、言葉もかはらず書いてのほせられけり。

(平家物語、卷第十、首渡)

30は、色も変わることなく、花が咲いているということであり、31は、同じ調子で念誦をするということであり、32は、同じ言葉を使って手紙を書いたということである。いずれも後続する動作・行為のありさま・ありかたを修飾するものとして「AモB（変はらず）」があるものである。変わりそうなもの・変わっていることもありそうなものが変わらないうちにある状態のまま、後続の事象が起こるといふ含意のものもある。たとえば、30は、荒涼とした旧都となってしまったから、花は咲いていても昔の色とはちがっていることが十分予想されるのに、そうではないということである。31は、心が乱されるようなことがあってもおかしくはないのに、すこしも普段と変わらない様子で経を唱えている、ということである。

方丈記の当該箇所は、（形式上ではなく）内容上は、まずはこのような構文に近いものと理解することはできないだろうか。そうすれば、

「トコロモカハラス」と「人モヲホカレト」とを、内容上対になるものとして解釈する必要も解消する。すなわち、「場所も同じである」ことが、「人が多くいる」ことのありかたを修飾するものととらえるのである。場所が違うならば人が多くても意味がない（あるいは人が多いかどうかを問うことができない）わけであるが、「場所が同じという状況下において、人が多くいる」という意味で理解することになる。もちろん、そのばあい、含意としては、「今も昔と変わらず人が多くいる」といった内容をあらわすことになる。つまり「変わらず」を時間的経過による変化の無いことを表すものと捉えることになる。そうすると、

ところも変わらず

変わらず人も多いけれども

といったように、重層的に理解することも可能となろう。

そのうえで、形式上「AモB」「CモD」といった形に整えられているわけである。第二文がそうであったように、この冒頭の文章には、内容上の関係と、形式上の関係が必ずしも一致しない点が複数あり得るように考えられる。それはもちろん、整理の不足によるものではなく、意図したものと考えるのが妥当であろう。第二文にしても、この箇所にしても、単層的でなく、内容と形式の重層的な解釈が可能になるからである。

五―三 昔シ・イニシへ

ところで、ここまでのところで、「昔シアリシ家」④、「イニシへ

見シ人」⑧とあるが、どうしてはじめに「昔ありし家」としたものを、「いにしへ見し人」としているのであろうか。「むかし」「いにしへ」はここではほとんど同じ意味を表すものと見てよからうが、このばあい、「いにしへ」がこのように用言に係る連用修飾用法としてはほとんど用例が無い¹⁵という点で、やや不審な箇所ではある。ちなみに「むかし見し……」という用例は、次にあげるように容易にみつけることができる。

33 昔見し人々、用意ことなれば、「たよりあり」「よし」と思ひ

あへり。

（落窪物語、卷之三）

34 むかし見し松の梢はそれながら律は門をさしてけるかな

（栄花物語、あさみどり）

ここで「ムカシ見シ人」でなく「イニシへ見シ人」とした理由としては、例えば、音数をそろえるといったことが考えられる。「アリシ」に対し「見シ」で一音節少ないために、「ムカシ」の方を「イニシへ」と一音節増やしてバランスを取ったとみるのである。さらにそうすれば、「ムカシアリシ」「イニシヘミシ」と三音節ごとに「シ」を配置することになり、語調が整うといった利点もありそうである¹⁶。

あるいは連用修飾用法でないとしたら、考えられる解釈は、通常の体言とみて「いにしへヲ見し人」と理解するということになる。つまり自分が知っている昔の状態を同じように見知っている人、といったことになるか。しかしこれは、「いにしへ」を「見る」その他の動詞の目的語としてとる例はきわめて稀であるうえに、そのようなやや苦しい理解のしかたをして得られる解釈も、連用修飾用法とみた場

合と実質的に変わらないという点で、あえてそのような理解をする必要性は低いといえよう。なお付言すれば、「いにしへ」を体言と見たのに対応させて「昔ありし家」の方も「昔」を体言とみるとすれば、「昔がありし家」、つまり昔（というもの）があった家と理解することにもなるが、これは形式的にも内容的にもより不自然と言つてよからう。そのように考えれば、どちらも連用修飾用法ととらえておくのが無難と思われる。

ところで「いにしへ」の連用修飾用法も、少ないとはいえず、決してないわけではない。たとえば、次にあげるようなものである。

35 いにしへ契りきこえはべりしことどもは、みなぞ思し忘れた
りける。
(うつほ物語、楼の上上)

36 いにしへ盛りと見えし御若髪も、年ごろに衰へゆき、

(源氏物語、初音)

ただし注意すべきは、いずれも連体修飾句内のものであるという点である。

むかし、家があった。

むかし、彼に会った。

といったように、主節の文末までかかるようなものは見られない。したがって、連体修飾句内においては、「いにしへ」の連用修飾用法も少ないながら見られるといったことは言えそうである。

第九文は、「朝二死ニ夕ニ生ル、ナラヒ（ただ）水ノアハニソ似リケル」というものである。第四文から第八文までで叙述されてきた、「人と住処」の無常についてまとめたものと考えられるので、ここまです

第二段とする。

六 第三段

第十文以降は、最後の「露」と「花」の比喩に直接つながる部分としてひとつながりの内容をもつとみとめられるので、第三段とする。

六一 又不知カリノヤトリ……

第十文は、「不知ウマレ死ル人イツカタヨリキタリテイツカタヘカ去ル」とあり、「生まれ死んでいく人は、どこからきてどこへ行くのか、わからない」というものである。第十一文は、「又不知カリノヤトリタカ為ニカ心ヲナヤマシナニ、ヨリテカ目ヲヨロコハシムル」とあり、「仮の宿りは、誰のために心をなやまし、何によつて目を喜ばせるのか、わからない」というものである。第十文は人について、第十一文は住処について述べたものであり、冒頭文全体を貫くテーマとしての「人と住処」について、そのはかなさ、頼りなさを説明したものと考えられる。また、形式的にも「不知……又不知……」と対句になっている。そしてこれも内容上必ずしもその対応関係がわかりやすいとはいえないが、それぞれの内容は、最後の「露」と「花」の比喩の理解にかかわる。

第十一文の方については、方丈記の後続箇所にも、

37 惣て世の人の栖を作るならひ、必ずしも事のためにせず。或

は妻子眷属のために作り、或は親昵朋友のために作る。或は主

君師匠および財宝牛馬のためにさへこれを作る。われ今身のた
めにむすべり。人のために作らず。ゆゑいかんとなれば、今の
世のならひ、この身のありさま、ともなふべき人もなく、頼む
べき奴もなし。縦ひろく作れりとも、誰を宿し、誰をか据ゑん。

(方丈記)

という記述があり、そこと同じ内容を述べたものと考えられるので、¹⁷
誰かほかの人(との関係)の為に家をつくることの無意味さ、自分個
人の分を超えた家をつくることのむなしさを述べたものと考ええるのが
自然であろう。

しかしそうなると、これと形式上対句形式になっている、第十文の
「人がどこからきてどこへ行くのかわからない」というのが具体的に
どういうことを指したもののなのか、必ずしも明確ではないが、佐竹昭
広校注(一九八九)が「この類の表現、仏典に多い」とし、「正法念
処経」「阿毘達磨大毘婆沙論」の例を挙げており、仏典にはよく見ら
れる表現のようである。いずれも人の命の無常を歎じたもののように
あるから、後述する第十二文において「無常を争う」という表現があ
ることもあわせ考えて、第十文・第十一文は人と住処の無常を表した
ものとみておくがまずは穏当であろう。仏典に見られる人の命につ
いての表現をふまえて、それをすみかと対にしてとらえるところに長
明の独自性があり、それが後述する「露」と「花」の比喩へつながっ
ていくものと、ここでは見ておくことにする。

六一二 タカ為ニカ・ナニ、ヨリテカ

この第十一文については、「ナニ、ヨリテカ」の解釈(現代語訳)
のしかたについて、従来の諸注釈の見解が一致しないところがある。
「タカ為ニカ」については37に挙げた箇所にも、対応する内容が含まれ
ることもあり、内容の理解に困難は無いとおもわれるが、「ナニ、ヨ
リテカ」については、築瀬一雄(一九七二)によると、それまでの諸
注釈においても、「何のために」「どういふ理由で」「どういふ心で」「ど
ういう積りで」などとさまざまなのが提示されているという。また、
神田秀夫校注・訳(一九七二)は、「何によりてか」の「よりて」は
手段ではなくて原因を問うているもの。「依りて」あるいは「縁りて」
であろう。そうすると、仏陀の縁起説のほうに近づけて訳文を作るべ
きだと思つたがどうもうまく訳せなかつた」とする。

こも「なによりて(か)」が実際にどのように使用されている
ものであるかをみると、次にあげるように反語の含意のあるものがお
おい。

38 万劫の罪滅さむ、悪しき身免れむとて、守り木づくれるを、

おのが一分の得分なし。何によりてか、汝が一分あたらむ

(うつほ物語、俊蔭)

39 わが御命どもをこそ知りましたまはね、宮の御有様は何によりて
さあらではあるべきぞと、思しとりたるにつけても、

(栄花物語、巻第七)

38は、万劫の罪を滅するために作った守り木を、自分ですら一片も得
られないのに、どうしてお前に与えることができようか、といってい

るものである。39は、皇后宮が、どうして安産でないということがあるか、どうしても安産であらねばならない、といっているものである。「よる」の文法的意味としては、確かに「原因・理由」ということになるうが、方丈記の当該箇所も、反語的含意を読み取るの方が重要であり、またそれで十分ではなからうか。

それは「たがためにか」も同じである。

40 あの手書き置きし文を読み聞かせけれど、「なにせむにか命も惜しからむ。誰がためにか。何事も用もなし」とて、薬も食はず。
(竹取物語)

41 数ならぬ身はなきものになし果てつたがためにかは世をも恨みん
(新古今和歌集、一八三八、寂蓮法師)

40は、何のために、誰のために命を惜しむのか、そのようなことをしても何の意味もない、といっているものである。41は、出家した自分は、世を恨む意味も必要もない、といっているものである。

つまり、「よる」が「原因」を表すものだとすると、「方丈記」第十一文は、住処について、心をなやまし、目を喜ばせることについて、その「原因」を問うているのではなく、それらの無意味さ、不必要さを歎じたものである。

そして内容の上で肝心なのは、第十文は人の命の無常を歎じたものであるのに対し、この第十一文は、単純にそれと並行的に、住処の命、すなわち家はなく無くなってしまうことや、盛衰がはげしいことを歎じたものではないということである。

六―三 露・花

第十二文は、「ソノアルシトスミカト無常ヲアラソフサマイハ、アカホノ露ニコトナラス」として、あるじと住処とが無常を争うさまを、「朝顔の露」にたとえている。そして続く第十三文以降では、「露」と「花」とが、互いに一方が減び去ったあと、もう一方もなげられることはない、ということ述べている。

第十三文以降「露」「花」の対比になっているのに、なぜ第十二文には「朝顔の露」とあつて「花」とはないのか。これについては、「朝顔の（花と）露（と）に異ならず」と補つて解すべきであろう（安良岡康作一九八〇）とか、「いわば朝顔の花の露と全く同じだ」（浅見和彦二〇一一）などと、「花」の要素を補つて訳すものもあるが、それは、後に続く「露」と「花」の対にならつて揃えたものであろう。

しかし、表現としては、「朝顔の露」とのみあるのが、文学作品の中では一般のようである。

42 はかなくて過ぎにしかたを思ふにも今もさこそは朝顔の露
(山家集、七七七)

「露」と「花」とを「あるじ」と「すみか」とにたとえるのが長明の独創だとすれば、それは当然のことでもあるが、「朝顔の露」で42のようにはかなく消え去ってしまうものの象徴として使用されるものようである。また、

43 朝顔の露落ちぬ先に、文書かむと、道のほども心もとなく、
(枕草子、七月ばかりいみじう暑ければ)

44 おく露のほどをも待たぬあさがほは見ずぞなかなかあるべか

りける

(大和物語、三十九)

のように、露が落ちるまでの時間が非常に短いものであることを踏まえた表現もみられる。

そもそも露が単独で存在するものではありえないのだから、ここで「朝顔の露」も、内容としては露の置く場所をふくんでいると考ええることもできようか。ただし問題になるのは、「露」は朝顔のどこに置くのか、ということである。ここでは「露」と「花」の対がこの後で説かれるのであるから、露が置く場所は「花」でしかありえないようでもあるが、たとえば「葉」にも露は置くわけである。その疑問を念頭に置き、後続の文へとすすむ。

第十三文・第十四文は、「或ハ露ヲチテ花ノコレリ」(13)、「ノコルトイヘトモアサ日ニカレヌ」(14)であり、露が落ちて花が残っても、遠からず朝日にかけてしまう、ということである。それに対し、第十五文・第十六文は、「或ハ花シホミテ露ナヲキエス」(15)、「キエストイヘトモタヲマツ事ナシ」(16)とある。第十三文・第十四文の「露」「花」をいれかえた関係にあるだけであるから、理解は容易に見えるが、素朴な疑問として、花が萎んでいのに露が消えずに残るといのはどうということか。露は萎んだ花のどこに置いているのか。「花」とは「花弁」「花びら」のことであろうから、萎んだ花びらの外側に露が置いているのだとしたら、花が咲いている間その露はどこにあったことになるのだろうか。

ここまで考えてきて、「露」と「花」は本当に「あるじ」と「すみか」に正確に対応しているのか、という疑問がわく。そこで考えるべきな

のは、この第三段冒頭、第十文と第十一文の内容である。第十文は人の命の無常をなげいたものであり、第十一文の内容は、家がはかなく無くなってしまうことや、盛衰がはげしいことを歎じたものではなく、誰かほかの人(との関係)の為に家をつくることの無意味さ、自分個人を超えた家をつくることのむなしさを歎じたものであった。つまり、「露」との対として述べられている「花」は、単に「露」(人・あるじ)の入れ物としての「すみか」「建物」のことではなく、その建物を豪勢に飾り立てることの象徴なのである。そうであるから、花が萎んでも、つまり「家」が往時の勢いを失い、没落してしまっても、人だけが生きているということが起こり得るのである。そしてそう言ったあるじも、いつまでもいきながらえるものではないというのである。さらに第十三文・第十四文の内容も、立派な家をつくっても、人の命ははかぬものであるから、あるじが死んでしまつてはむなしだけだ、と理解することが可能になる。したがって、「露」は「花」(花びら)に置いていなくてもよいのである。

そうした現象を「アルシトスミカト無常ヲアラソフサマ」(第十二文)といっているものであり、それは、「露」と「花」とをそれぞれ直接見くらべることでは必ずしもない。朝顔に露が置いている現象を見、その露が朝顔という植物あるいは花全体との間にもつている関係を見れば、そこに「無常ヲアラソフサマ」が表れているというのである。つまり、強いて述べれば、「露」の入れ物としての「すみか」「建物」は、花びらとしての「花」ではなく、朝顔の花(あるいはその植物)全体が対応している、と見ることが可能になる。したがっ

て、先述の「朝顔の露」の箇所も、「花」の要素を補って理解する必要はないことになる。

六一四 シホミテ

最後に、ここでも、植物がしおれることだけでなく、人などが衰え活力がなくなることを表し得る「しほむ」という語が選択されていることを指摘する。これも当然、意図したものと考えられる。

45 みな人の花のころもをきるなかにひとりぞ老にしほみはてぬ
る (躬恒集、一八六)

この例で「しほみはて」てしまう原因は「老い」である。つまり、特定のきっかけがあるわけではなく、時間の経過とともに必ずそうなるものである。かつては威勢を誇っていたとしても、「花」はいつかかならずしぼんでしまうというのが、「無常ヲアラソフ」ということなのである。

七 まとめ

本稿では、「方丈記」冒頭文を題材に、文と文章の構造を検討することで、和漢の典拠をもとめることとはちがった角度から、この文章の内容をくわしく読解することをこころみた。

「人ト栖」を主題とし、それをさまざまな比喩で説明しているという構造は第一文から一貫しているということとともに、第一文にみられる「シカモ」でつながれる前後の意味的關係もまた、そのまま後段

へひきつがれていっている、ということも、あらためてあきらかになつた。しかも、両義的な語を各所に配置することにより、形式と内容の両面が密接に絡み合ったかたちで文章が構成されており、まさしく名文といえる。

- 1 本稿では「冒頭文」を冒頭の文章という意味で使用する。冒頭の一文のみをさすものではない。
- 2 そのために、先行する（または同時代やそれ以降のものも含めて）文学作品等からの、言語表現にかかわる用例を参照することによって論を進めるが、それらは鴨長明が、「方丈記」を著すにあたって「撰取」したものであるという観点からのみとりあげるものではない。当時の日本語の文章において「あり得る」言語表現をさぐるためにもとりあげるものである。
- 3 また、その「不要」な語が「川の流動感を印象的に伝える」ということがどういうことかということも、理解しにくい。
- 4 ただし、「法句経」の一節を引用するものの、それを見る限り、「ユク河」「ユク河ノナカレ」というそれぞれひとまとまりの表現に形式上直接に対応する表現がみられるわけではない。
- 5 佐竹昭広校注（一九八九）も、そのようにはっきり主張しているわけではもちろんない。
- 6 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注（二〇一三）『万葉集』（二）には、この歌の第二句に関して、「すぎにし

ひとの」と訓む説も多いとするが、そうであっても枕詞的であることにかわりなく、また「すぐ」「すぎゆく」に係るといのは類似性が高いとみてよい。

7 「的用法」というのは、用例も少なく、狭義の「枕詞」とは言えないものの、「枕詞」と同様の表現効果をもつものとして理解できるといふことである。第四文の「タマシキノ」が同様の理由で枕詞「的」と言われるのと同様の意味で「的用法」とするものである。

8 安良岡（一九八〇）もこの二例の存在を示すが、4の方を「方丈記」当該箇所とおなじものとし、3を異なるものとする（根拠は特にしめされない）。本稿はそれと正反対の理解の仕方をするということになる。

9 各種注釈書（一般向けのものも含めて）や、高等学校教科書等においてこの一節を取り上げる際に、「行く川の流れ」という小見出しを付すものも少なからずみられるが、そのようなものとは異なる理解の仕方をしめすものである。

10 堀川善正（一九八六）に「シカモ」の用法の詳細な考察がある。以下の10・11の例もそこで（あるいは他者の研究においても）言及されているものである。本稿のここでの考察は、説明がそれらと重複することを避け、「しかも」の用法そのものの問題よりも、「方丈記」冒頭文においてそれがもつ解釈上の問題と、先行研究における議論に対する私見を中心にすすめることとする。

11 付言すれば、その際、「逆接」という表現は必ずしも適切とは言えない。「逆接」「順接」とは一般に前件と後件との論理的関係を表

すものであり、このばあいのように意味内容上の問題をあつかう際には必ずしもなじまない。本稿において、以下「逆接」とカッコつきにするのは、そうした意味内容上相反するもしくは通常併存しにくいものになっている「しかも」のことである。

12 堀川善正（一九八六）のいう「矛盾反発的添加」というものに近い考え方と思われる。

13 「うたかた」を単に「水の泡」と注することに對する異論は、小松英雄（二〇〇八）にもある。

14 ただしこの二例はどちらも「うたかたの」の形の枕詞と考えられる。

15 このことの指摘は、工藤力男（二〇一二）にもある。

16 この文章に「シ」等、同音の反復が多いことは、小松英雄（二〇〇八）にも指摘がある。

17 神田秀夫校注・訳（一九九五）は、ここではなく、「宝を費し、心を悩ます事」の部分を引き、「家を建てる算段をするような、世事に神経をすりへらすことを言おうとしているらしい」とする。内容上関連のある箇所として、「宝を費し、心を悩ます事」の部分は確かに重要ではあるが、そこから導かれる「世事に神経をすりへらす」といった説明については、それと異なる解釈を、本論の後述する部分で、「露」と「花」の比喩に関連して提示することになる。

調査資料

用例検索・調査には、下記のデータベース・テキストを使用した。例

文の引用は、以下の文献による。

- 「論語」：『新釈漢文大系』明治書院
「十訓抄」「伊勢物語」「新古今和歌集」「うつほ物語」「徒然草」「方丈記」（用例14・21・37）「古今和歌集」「源氏物語」「竹取物語」「堤中納言物語」「和泉式部日記」「夜の寝覚」「太平記」「大鏡」「平家物語」「落窪物語」「栄花物語」「枕草子」「大和物語」：『新編日本古典文学全集』小学館（ジャパンナレッジも利用した）
「万葉集」：佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注『万葉集』全五冊、岩波文庫
「無名抄」「山家集」：『日本古典文学大系』岩波書店（国文学研究資料館の日本古典文学本文データベースも利用した）
芥川龍之介「偷盗」：『芥川龍之介全集』岩波書店
太宰治「お伽草紙」：『太宰治全集』筑摩書房
「後撰和歌集」「千載和歌集」：『新日本古典文学大系』岩波書店
「赤染衛門集」：『和歌文学大系』明治書院
夏目漱石「草枕」：『漱石全集』岩波書店
加藤盤齋「長明方丈記抄」：築瀬一雄編『方丈記諸注集成』豊島書房
「躬恒集」：『新編国歌大観』第七巻、角川書店

参考文献

- 青木伶子編（一九六五）『広本略本方丈記総索引』武蔵野書院
浅見和彦（二〇一一）『方丈記』ちくま学芸文庫
神田秀夫校注・訳（一九七二）『方丈記 徒然草 正法眼蔵随聞記 歎異抄』

（日本古典文学全集27、小学館）

- 神田秀夫校注・訳（一九九五）『方丈記 徒然草 正法眼蔵随聞記 歎異抄』（新編日本古典文学全集44、小学館）
工藤力男（二〇一一）「むかし・いにしえー日本語雑記・拾遺」『成城文藝』219
小松英雄（二〇〇八）『丁寧に読む古典』（笠間書院）
佐竹昭広校注（一九八九）『方丈記 徒然草』（新日本古典文学大系39、岩波書店）
新聞水緒（二〇一四）「『方丈記』の序章について―『文選』『歎逝賦』注文との関係から―」（『国文学研究資料館紀要 文学研究篇』40）
手崎政男（一九九四）『方丈記論』笠間書院
手崎政男（二〇〇九）『通説方丈記』笠間書院
西尾実校注（一九五七）『方丈記 徒然草』（日本古典文学大系30、岩波書店）
藤原浩史（二〇〇六）「枕草子」第一段の国語学的解釈 潜在する論理の再構築」（『日本女子大学紀要 文学部』55）
堀川善正（一九八六）「しかも」の語源・語誌的考察』『語源探求』明治書院
三木紀人校注（一九七六）『方丈記 発心集』（新潮日本古典集成 第五回、新潮社）
安良岡康作（一九八〇）『方丈記』講談社学術文庫
築瀬一雄（一九七二）『方丈記全注釈』角川書店
築瀬一雄（一九七二）『方丈記解釈大成』大修館書店

付記 本研究はJSPS科研費16K16844の助成を受けたものである。

(二〇一六年十月三日受理)

(なるみ しんいち 文学部日本・中国文学科准教授)